

セミナー報告

セミナー2 「シェイクスピア劇と同時代の娯楽・風俗文化」

コーディネーター：中野春夫（学習院大学教授）

メンバー：土井雅之（文教大学准教授）

丹羽佐紀（鹿児島大学准教授）

松岡浩史（熊本大学准教授）

コメンテーター：篠崎実（千葉大学教授）

シェイクスピアの演劇テキストには小唄（song）の歌詞やダンス（jig）のト書き、大道芸、チェス、見世物の場面が組み込まれ、台詞において熊いじめや売春業、飲食業の描写が具体的に行われている。小唄販売や売春業、見世物小屋などはどのような形態で行われ、同時代の芝居はその特性を舞台上でどう表現していたのか？小唄やダンス、演奏の存在は「大衆役者」演劇のミュージカル的なエンターテインメント性を物語っているが、これらの要素は歌謡文化のどこからどう採り入れられていたのか？

本セミナーが注目したのは小唄や大道芸から売春、アルコール販売、見世物興行までエリザベス朝演劇に採り込まれる周縁の娯楽ビジネスが16世紀イングランドにおける社会変化と密接に関わりあっていた現象である。16世紀イングランドの娯楽文化には、社会の諸変化——印刷機の導入によるコミュニケーション媒体の変化、「浮浪者」という新たな貧困層の出現とロンドンへの人口一極集中、交易勅許会社の設立によるヨーロッパ圏外からの産品や文化的情報の激増に対応して、大きな変化が生じるか、新たな要素が付け加わるかしていた。本セミナーは今一度娯楽コンテンツという演劇本来の社会的コンテクストに立ち戻り、シェイクスピア劇の特性を同時代の娯楽・風俗文化との影響関係から捉えなおした。

対象の分野は中野が売春産業を対象とし、売春ビジネスが1546年のバンクサイド娼館閉鎖をきっかけとして新たな形態の総合エンターテインメントに発達し、シェイクスピア劇における売春宿や娼婦の表象が新形態の売春ビジネスに基づくことを検証した。

土井は飲食産業を対象とし、16世紀の「浮浪者文学（roguery literature）」における悪の巣窟のような「酒場」イメージが浮浪者取締法の制定・改正と呼応して形成・拡散されていく歴史的過程を具体的に分析し、大衆演劇が「酒場」神話だけでなく現実世界での飲食に関する嗜好変化をも投影していた実態を解明した。

丹羽はギャンブル関連を対象とし、サイコロやカードからチェスに至るまで人々を魅了し続けてきたギャンブルの世界が、初期近代イングランドではどのように受けとめられ、どのような形で大衆演劇に取り入れられたのか分析し、かつギャンブルにつきもののいかさまやいかさま師を生み出した社会的構造について検証した。

松岡は13世紀にロンドン郊外に設立された聖ベツレヘム病院が、貧民を対象とした小規模な慈善施設から、16世紀に狂人の「見世物小屋」に発展していく過程を娯楽文化史の視

座から分析し、怪物や狂人といった文化的他者が初期近代演劇テキストの中でどのように言説化されていたのかを具体的に指摘した。

篠崎はコック・ローレルと呼ばれるフィクション上の浮浪者王を題材としたブロード・シートン版のバラッドに注目し、これら民衆文化的な娯楽商品が16・17世紀の大衆劇場の劇作品や宮廷演劇とどう関連していたのか、コック・ローレル表象をめぐる文化的流通経路を具体的に検証することにより、従来想定されていたのとは異なる民衆文化生成のダイナミックなプロセスを明らかにした。

